



企画にあたって

林田健太郎（慶應義塾大学医学部循環器内科）

鶴田ひかる（慶應義塾大学医学部臨床検査医学）

人口高齢化に伴い増加の一途を辿る三尖弁閉鎖不全症は、心不全、左心系弁膜症の予後規定因子であり、診断と治療介入判断の重要性について認識が高まっています。一方で、外科手術による単弁治療成績は、左心系弁膜症よりも不良であり、特に右心不全、臓器障害が重篤化してからの治療介入成績が不良であることから、“too late”な治療介入の問題が明らかにされ、三尖弁閉鎖不全に伴う症状と右心不全の病態進行を認識することの難しさ、治療介入時期の判断の難しさが浮き彫りにされてきています。

近年、欧米やアジアの国々では、経カテーテル三尖弁治療の普及により新たなエビデンスが示され、日本国内においても複数の治験が始まり、低侵襲治療への期待が高まっています。三尖弁の術式検討において、解剖の理解、3次元心エコーによる診断はますます重要となり、治療の進歩に伴い、新たな重症度と病態の評価法も求められています。左心系弁膜症、心房細動、肺高血圧を合併した三尖弁閉鎖不全をどう管理するか、さらに、右室機能評価は重要な問題ですが、エビデンスが限られ、課題が多い状況です。三尖弁に対する修復手技を外科医はどのように考えているかを内科医が知ることは重要であり、そのうえで現在、急速な普及が進む経カテーテル治療の適応、予後に及ぼす影響の知見を深めることが求められます。

本特集では、現在求められる三尖弁閉鎖不全症の診断、治療に関する最近の知見について、「どのように三尖弁を評価し」、「いつ、誰に、どのように治療するのか」理解を深めることを目的に企画しました。エキスパートの先生方にご執筆をいただき、三尖弁に対する考え方のエッセンスが凝縮された、大変学びの多い特集となっております。皆様の日常臨床の一助となりましたら幸いです。